大衆の支持を受けることの重要性とそのための大衆の政治的経験の必要性

プロレタリア前衛は思想的にはわれわれのほうにかちとられた。これは主要なことである。これがなければ、勝利への第一歩さえ踏みだすことはできない。だが、ここから勝利まではなおかなり遠い。前衛だけで勝利することはできない。すべての階級が、広範な大衆が、前衛を直接に支持する立場をとるか、それとも、前衛にたいして好意的中立の立場、前衛の敵を支持することがまったくできない立場を取るかしないかぎり、前衛だけを決戦に投入することは、ばかげたことであるばかりでなく、罪悪でもある。ほんとうにすべての階級が、勤労し資本に抑圧されている人々のほんとうに広範な大衆が、このような立場に達するには、宣伝だけでは、煽動だけではたりない。そのためには、これらの大衆がみずから政治的経験をすることが必要である。これは、あらゆる偉大な革命の基本法則であって、いまではロシアばかりでなく、ドイツによっても驚くほど力づよく、あざやかに確証されている。教養がなく、往々読み書きできないロシアの大衆ばかりでなく、教養が高く、ひとりのこらず読み書きできるドイツの大衆も、決定的に共産主義に向きをかえるようになるためには、第二インタナショナルの騎士たちの政府のまったくの無力、まったくの無定見、まったくの頼りなさ、ブルジョアジーにたいするまったくの追従的態度、まったくの卑劣を身をもって体験し、またプロレタリアートの独裁をとらないかぎり、ただ一つ、極反動派（ロシアのコルニーロフ派、ドイツのカップ一味）の独裁がまったく避けられないことを、身をもって体験する必要があった。

国際労働運動内の自覚した前衛、すなわち共産党、共産主義グループ、共産主義的流派の当面の任務は、広範な（いまのところ大多数のばあい、まだ眠っており、無感動で、因襲にとらわれ、不活発で、目ざめていない）大衆を、この新しい立場に**導いていく**すべを知ることであり、もっと正確に言えば、自分の党**ばかりでなく**、これらの大衆が新しい立場に、近づき、うつろうとするのを指導するすべを知ることである。第一の歴史的任務（プロレタリアートの自覚した前衛を、ソヴェト権力と労働者階級の独裁の味方に引きいれること）は、日和見主義と社会排外主義に思想上および政治上で完全に勝たなければ、はたしえなかったが、いま当面のものとなっている第二の任務、革命で前衛の勝利を保障することのできる新しい立場に**大衆**を導いていくすべを知るという任務は、左翼的な空理空論が一掃され、その誤りが完全に克服され、そこから脱却するのでなければ、これをはたすことはできない。

プロレタリアートの前衛を共産主義の味方に引きいれることが問題となっていたあいだ（また、まだ現に問題となっているかぎり）は、そのかぎりでは、宣伝が第一位に押しだされていた。サークル根性のあらゆる弱点をもっているサークルでさえ、そこでは有用であり、実りの多い成果をあげる。だが、大衆の実践的行動が問題となり、何百万という軍勢を配置し――このような言いまわしがゆるされるならば――その社会のすべての階級勢力を、**最後の決戦のために**配備することが問題となるときは、そこではもはや宣伝の習慣だけでは、「純粋」共産主義の真理を繰りかえすだけでは、なんの役にもたたない。ここでは、まだ大衆を指導したことのない宣伝家、小グループのメンバーが実際にやっているように、何千ぐらいの単位でかぞえてはならない。ここでは、何百万、何千万を単位にか

ぞえなければならない。ここでは、われわれが革命的階級の前衛を説得したかどうか自問してみるだけでなく、さらに**すべての**階級の――例外なくかならずその社会のすべての階級の――歴史的に行動する勢力が、決戦の機がすでに完全に熟したと言えるような配置についているかどうか、すなわち、（一）われわれに敵対するあらゆる階級勢力が十分に混乱し、十分に同志打ちを演じ、自分の力にあまる闘争で十分に自分を無力にし、（二）すべての動揺的な、ぐらついた、不安定な中間分子、すなわち小ブルジョアジー、つまりブルジョアジーとはちがう小ブルジョア的民主主義派の正体が人民の面前で十分に暴露され、その実際の破産によって十分に恥をさらけだし、（三）ブルジョアジーにたいする断固とした、一身をかえりみないほど勇敢な、革命的行動を支持しようとする大衆的な気分が、プロレタリアートのなかにおこり、力づよくたかまりはじめていると言えるような配置についているかどうか自問してみなければならない。こういうときこそ、革命の機は熟しているのである。こういうときこそ、上述の簡単に概略を述べたすべての条件をただしく考慮にいれ、時機をただしくえらぶならば、われわれの勝利は保障されている。

一方ではチャーチル一派とロイド-ジョージ一派のあいだの意見の食いちがい――これらの政治的タイプは、国によってごくわずかの違いはあるが、**すべての**国にある――があり、つぎに他方では、ヘンダソン一派とロイド-ジョージ一派のあいだに意見の食いちがいがあるが、これは、純粋な、すなわち抽象的な、すなわちまだ実践的・大衆的な政治行動を取るまでに成熟していない共産主義の見地からみると、まったくたいしたことのない、つまらないことである。だが、大衆のこの実践的な行動の見地からみれば、この意見の食いちがいは、きわめて重要なものである。これらの意見のくいちがいを考慮にいれ、これらの「仲間」同士の避けられない衝突がまったく熟しきって、**「仲間」全体をもろともに**よわめ、無力にする時機を確定すること――この点にこそ、自覚した、確信のある、思想的宣伝家にとどまらず、革命で大衆の実践的な指導者となろうとおもっている共産主義者のすべての問題があり、すべての任務がある。ヘンダソン一派（個々の人物の名まえをあげないとすれば、第二インタナショナルの英雄たち、社会主義者と自称している小ブルジョア的民主主義派の代表者）の政治権力を実現させ、かつその克服を促進するためには、また大衆をまさにわれわれの精神で、まさに共産主義の方向に啓蒙することになる彼らの実際上の不可避的な破産を促進するために、またヘンダソン一派、ロイド-ジョージ一派、チャーチル一派のあいだの（メンシェヴィキとエス・エル――カデット――君主主義者、またシャイデマン一派――ブルジョアジー――カップ一派、等々のあいだの）避けられない軋轢、いがみあい、衝突、完全な分裂を促進するためには、またすべてこれらの「神聖な私有財産の支柱」のあいだの分裂が最大に達する時機をただしくえらぶためには、またプロレタリアートの断固たる攻撃によって彼らすべてを打ちやぶり、政治権力を獲得するためには――すべての必要な実際上の妥協、迂回、協調、ジグザグ、退却、等々をおこなう能力を、共産主義の思想にたいするもっとも厳格な献身と結合しなければならない。

一般に歴史は、とくに革命の歴史は、もっともすぐれた政党が、またもっともすすんだ階級のもっとも自覚した前衛が頭にえがいているよりも、いつでも内容が豊かで、多様で、多面的で、生き生きとしており、「油断ができない」ものである。これは当然のことでもある。なぜなら、どんなにすぐれた前衛でも、何万人かの意識、意志、情熱、空想をあらわすだけであるのに、革命は、もっとも激しい階級闘争でかきたてられる何千万人もの意

識、意志、情熱、空想によって、人間のあらゆる能力が特別にたかまり、緊張する時機に、実現されるものだからである。ここから、きわめて重要な二つの実践的な結論がでてくる。第一に、革命的階級は、その任務を実現するためには、すこしの例外もなしに、社会活動の**あらゆる**形態、あるいは側面をわがものにすることができなければならない（政治権力を獲得したのちには、それを獲得するまでになしとげなかったことを、ときには大きな冒険やたいへんな危険をおかしてなしとげる）。第二に、革命的階級は、一つの形態が他の形態にどんなに急速に、不意にとってかわっても、それに応じられるようでなければならない。（第 31 巻『共産主義内の「左翼主義」小児病』P81～85、1920 年 4 月～ 5 月に執筆）

ポイント

プロレタリア前衛が思想的にはわれわれのほうにかちとられなければ、勝利への第一歩さえ踏みだすことはできない。だが、ここから勝利まではなおかなり遠い。前衛だけで勝利することはできない。すべての階級が、広範な大衆が、前衛を直接に支持する立場をとるか、それとも、前衛にたいして好意的中立の立場、前衛の敵を支持することがまったくできない立場に達するには、宣伝だけでは、煽動だけではたりない。

プロレタリアートの前衛を共産主義の味方に引きいれることが問題となっていたあいだは、そのかぎりでは、宣伝が第一位に押しだされていた。サークル根性のあらゆる弱点をもっているサークルでさえ、そこでは有用であり、実りの多い成果をあげる。だが、大衆の実践的行動が問題となり、その社会のすべての階級勢力を、最後の決戦のために配備することが問題となるときは、そこではもはや宣伝の習慣だけでは、「純粋」共産主義の真理を繰りかえすだけでは、なんの役にもたたない。そのためには、これらの大衆がみずから政治的経験をすることが必要である。これは、あらゆる偉大な革命の基本法則である。

（一）われわれに敵対するあらゆる階級勢力が十分に混乱し、十分に同志打ちを演じ、自分の力にあまる闘争で十分に自分を無力にし、（二）すべての動揺的な、ぐらついた、不安定な中間分子、すなわち小ブルジョアジー、つまりブルジョアジーとはちがう小ブルジョア的民主主義派の正体が人民の面前で十分に暴露され、その実際の破産によって十分に恥をさらけだし、（三）ブルジョアジーにたいする断固とした、一身をかえりみないほど勇敢な、革命的行動を支持しようとする大衆的な気分が、プロレタリアートのなかにおこり、力づよくたかまりはじめていると言えるような配置についているときこそ、革命の機は熟しているのである。こういうときこそ、時機をただしくえらぶならば、われわれの勝利は保障されている。

このように大衆をまさにわれわれの精神で、まさに共産主義の方向に啓蒙するためには、われわれに敵対するあらゆる階級勢力の避けられない軋轢、いがみあい、衝突、完全な分裂を促進し、彼らの実際上の不可避的な破産を促進しなければならない。そのためには、すべての必要な実際上の妥協、迂回、協調、ジグザグ、退却、等々をおこなう能力を、共産主義の思想にたいするもっとも厳格な献身と結合させなければならない。